

マルコによる福音書 15 章 21 節～32 節

2019 年 3 月 27 日

古本 靖久

1、聖歌 145 番 「血しおしたたる」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 95 ページ）

4、テキストの位置

いよいよイエス様は、十字架を背負い、処刑場に向かいます。この時のイエス様の歩みを、新約聖書の四つの福音書の記述やキリスト教の伝承などから想定することができます。それはヴィア・ドロローサ(苦難の道)と呼ばれ、十字架の道行きとして大切にされています。

エルサレムにて	金曜日	15:1-5	ピラトの尋問
		15:6-15	バラバとイエス
		15:16-20	兵士の嘲弄
		15:21-32	十字架
		15:33-41	死
		15:42-47	墓
	日曜日	16:1-8	復活
		16:9～	結び

17～20 世紀に見られる代表的な「十字架の道行き」の留は以下のようになります。

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| ①ピラトはイエスに死を宣告する。 | ②イエスは十字架を受け入れる。 |
| ③イエスは初めて倒れる。 | ④イエスは聖母マリアに会う。 |
| ⑤キレネのシモンは十字架を担うのを助ける。 | ⑥ヴェロニカはイエスの顔を拭く。 |
| ⑦イエスは再び倒れる。 | ⑧イエスはエルサレムの婦人たちと会う。 |
| ⑨イエスは三度倒れる。 | ⑩イエスは服をはぎ取られる。 |
| ⑪イエスは十字架に釘付けにされる。 | ⑫イエスは十字架上で死去される。 |
| ⑬イエスは十字架から降ろされる。 | ⑭イエスは墓に葬られる。 |

このように、聖書の記述にはない伝承が多数含まれています。ローマカトリック教会では近年、福音書の内容に合わせた新しい「十字架の道行き」も考えられているようです。

十字架の場面を直視するのは辛いことですが、十字架に向かうときに何が起こっていたのか、見ていきたいと思えます。

5、節ごとに

◆十字架

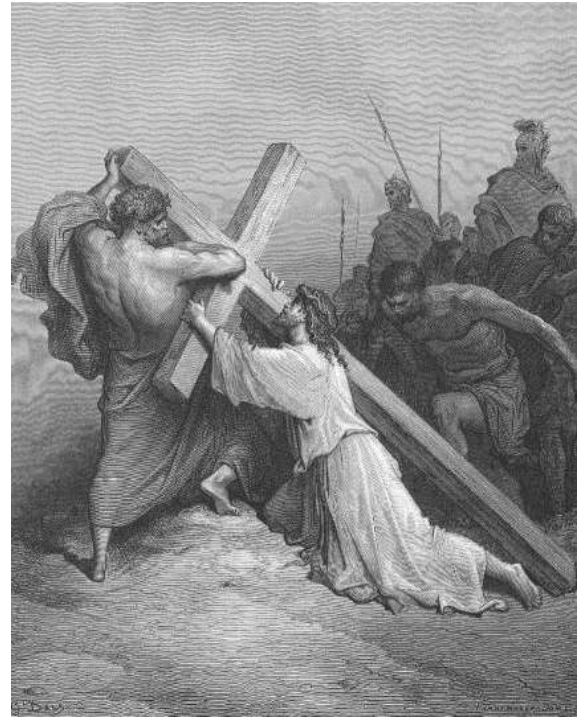
15:21 そこへ（そして）、アレクサンドロとルフオスとの父でシモンというキレネ人が、母舎（畑）から出て来て通りかかったので、兵士たち（彼ら）は（徴用し）イエス（彼）の十字架を無理に担がせた。

十字架刑を受けた犯罪者は、郊外にある処刑所まで十字架の横木を運ばなければなりません。柱はすでに刑場に立てられているので、よく絵画で見られるように十字に組み立てられた木を運んだわけではありません。

この記述通りだと、イエス様は十字架を一度も担いでいないようにも取れます。イエス様は裁判や兵士たちによる暴行によって、すでに憔悴してしまっていたのかもしれない。そこでたまたま通りかかったシモンに、十字架を背負わせませす。ローマ兵の命令は、断ることのできないものでした。

キレネ人シモンとその息子二人の名前が聖書に書かれているところを見ると、彼らは初期の教会ではよく知られていた人物だったのでしょうか。彼らの存在が、イエス様の十字架が実際に起こったということを証明しているのです。

ちなみに、このシモンがイエス様の身代わりとなって十字架につけられて死んだと主張するグループもありましたが、異端として退けられました。



15:22 そして、イエス（彼）をゴルゴタという所（場所）——その意味は（訳せば）「されこうべの場所」——に連れて行った（来る）。

ゴルゴタはアラム語で、されこうべを意味する言葉です。丘の斜面に面した岩に穴が開き、頭蓋骨のように見えたのではないのでしょうか。紀元 335 年にゴルゴタの場所を推測し、聖墳墓教会が作られましたが、この時代には城壁の外に位置していました。その丘まで、十字架の道は続いていました。

なお、聖歌 251 番には「カルバリの木にかかり」という歌詞があります。「カルバリ」は「ゴルゴタ（されこうべ）」のラテン語で、聖書には出てきません。カトリック教会で使われていたラテン語訳聖書から、「カルバリ」という名前が一般化したようです。

15:23 (そして彼らは彼に) 没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとした(与えた)が、イエス(彼)は(それを)お受けにならなかった。

没薬を混ぜたぶどう酒は、苦痛を和らげるための麻酔薬として使われていました。またエルサレムの女性たちは、箴言 31 章 6 節「強い酒は没落した者(直訳:死に瀕している者)に 酒は苦い思いを抱く者に与えよ」の命令に従って、処刑される囚人にぶどう酒を与えていたことも知られています。



しかしイエス様は、それを受けませんでした。それはイエス様が最後まで苦しみをそのまま受けられたということを意味します。神さまが備えられた道に対して、あくまでも従順なイエス様の姿がここでも描かれます。

15:24 それから、兵士たち(彼ら)はイエス(彼)を十字架につけて、(る。そして)そ(彼)の服(衣)を分け合った、だれが何を取るかをくじ引きで決めてから(た)。

詩編 22 編 18~19 節に「骨が数えられる程になったわたしのからだを 彼らはさらしものにして眺め わたしの着物を分け 衣を取ろうとしてくじを引く」という言葉があります。処刑される人の衣を兵士が分け合うことは、ローマの慣習だったそうです。

イエス様は十字架につけられました。福音書には釘で打たれる場面など、十字架につけられるときの肉体的な苦痛には触れません。驚くほど淡々と、その場面は過ぎていきます。

15:25 (彼らが)イエス(彼)を十字架につけたのは、午前九時であった。

ヨハネ福音書ではイエス様の裁判が正午になっており、この記述との整合性はみられません。マルコ福音書ではそれ以外にも、次のような時間の経過が報告されています。

人々がイエス様を十字架につけた → 午前 9 時
全地が暗くなった → 昼の 12 時
イエス様、息を引き取られる → 午後 3 時

このように時刻を際立たせた記述があるのは、これは神の時であり、神さまのご計画と目的が着実に達成していることを示しているのです。

15:26 (そして彼の) 罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。

処刑される人の罪状は、板に書いて掲示されるのが一般的でした。「ユダヤ人の王」という言葉は、イエス様が反逆または反乱を誘発する行動をしたことを示し、そのことによってローマは彼を処刑するのだということを伝えています。

15:27 また(そして)、イエス(彼)と一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。

イエス様の両側には、二人の強盗がいました。彼らはローマに反乱を起こした革命家かもしれません。イエス様がその中心的位置にいるというのも皮肉な話です。

ルカによる福音書では、この二人の強盗との間に物語が生まれます。それは一人の強盗がイエス様をののしり、もう一人がたしなめるというものです。そして「あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください」という強盗にイエス様は、「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われるのです。

しかしマルコ福音書では、強盗との会話は出てきません。ここで強調されているのは、イエス様が罪人と共に十字架につけられ、そして息を引き取られたということだけです。

15:28 十こうして、「その人(彼)は犯罪人(罪人)の一人に数えられた」という聖書の(書いてある)言葉が実現(成就)した。

28 節は聖書本文には出てきません。かわりに「十」という記号がついているだけです。何度かすでに出てきましたが、聖書の凡例には「新約聖書の底本に節が欠けていることを示す。この部分の異本による訳文を当該書の末尾に付した」とあります。つまりこの部分は、最初に聖書が書かれたときにはなかったけれども、途中で書き加えられたと思われる節だということです。

イザヤ書 53 章 12 節にはこのようにあります。

それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし 彼は戦利品としておびたしい人を受け
る。彼が自らをなげうち、死んで 罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人を過ちを担い
背いた者のために執り成しをしたのは この人であった。

この預言の言葉を、後の時代の人々はイエス様の十字架に重ね合わせたのでしょうか。そして聖書の記述に加えたのかもしれません。

15:29 (そして)そこを通りかかった(過ぎる)人々は、頭を振りながらイエス(彼)をののしって(冒瀆して)言った。「おやおや(ああ)、神殿を打ち倒し、三日で(また)建てる者(よ)、

頭を振りながらという仕草は、オリエント世界では侮辱を表す行為です。

わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い唇を突き出し、頭を振る。(詩 22 : 8)

道行く人はだれもかれも 手をたたいてあなたを嘲る。おとめエルサレムよ、あなたに向かって 口笛を吹き、頭を振ってはやしたてる 「麗しさの極み、全地の喜びと たたえられた都がこれか」と。(哀歌 2 : 15)

神殿を打ち壊し…という言葉は、最高法院での裁判の場面で出て来たものです。偶然通りがかった人たちが、そのことを知っていたというのは不自然です。マルコ福音書はここからの数節で、すべての登場人物がイエス様を拒絶し、侮辱していたということを報告していきます。

15:30 十字架から降りて(自分で)自分を救ってみろ。」

「自分で自分を救ってみろ」、まるで荒れ野の誘惑で悪魔がイエス様に語った言葉のようです。イエス様の耳にこの言葉が届いていたならば、イエス様はどのような聖書のみ言葉を用いて誘惑に打ち勝ったのでしょうか。

もしもこのとき、イエス様が十字架から降りて来たとしたら、それはすごい奇跡だと思います。人々は驚くでしょう。「驚くべきものを見た」と騒ぎ立てるかもしれません。しかしそれだけなのです。



15:31 同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わる(お互いに)イエス(彼を)を侮辱して(あざけて)言った。「他人は救ったのに、自分は(を)救え(うことができ)ない。

このゴルゴタの丘に、祭司長や律法学者の姿も見られます。これも不自然なことです。なぜならこの日は過越祭の真っ最中で、十字架刑の場に彼らがいることはありえないからです。

考えられるのは彼らの怒りがそれほど激しく、我を忘れてゴルゴタまで来たか、マルコ福音書がユダヤ教当局者の罪を強調するためにここに登場させたか、どちらかだと思います。

15:32 メシア、イスラエルの王（キリストよ）、今すぐ十字架から降り（てみ）るがいい。それを見たら、信じてやろう。」（彼と）一緒に十字架につけられた者たちも、（また）イエス（彼）をののしった。

彼らはイエス様がもしも十字架から降りて来たならば、「見て、信じる」と口走ります。しかしイエス様の弟子たちでさえ、「見て、信じる」ことはできませんでした。彼らが信じることができるようになるのは、復活のイエス様に出会ってからです。

そしてイエス様と共に十字架につけられた二人の強盗もまた、イエス様をののしります。強盗の一人がもう一人をたしなめたルカの記述と違い、マルコでは二人ともイエス様をののしるのです。

イエス様はすべての人から見棄てられました。完全な孤独です。そして時は静かに過ぎていきます。

<今日の箇所から>

今日の箇所に、イエス様の姿はずっとあります。しかし一言も話されていません。それどころか、何を思い、どのような表情をされていたのかも、まったく触れられていません。

彼は軽蔑され、人々に見捨てられ 多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病 彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに わたしたちは思っていた 神の手にかかり、打たれたから 彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは わたしたちの背きのためであり 彼が打ち砕かれたのは わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって わたしたちに平和が与えられ 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。わたしたちは羊の群れ 道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて 主は彼に負わせられた。苦役を課せられて、かがみ込み 彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように 毛を切る者の前に物を言わない羊のように 彼は口を開かなかった。
(イザヤ書 53 章 3～7 節)

この言葉を静かに黙想したいと思います。この大斎節に、口を開くことなく十字架への道を進まれたイエス様を覚え、祈りたいと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は 4 月 25 日(木)10 時半からです。「死、墓」(マルコ 15 : 33～47) について学んでいきます。